ナイチャーも同じシマンチュウ

民話の宝庫・宮古島一周の旅

葛飾区民記者・かつしかＰＰクラブ

隅田　昭

まえがき

記者の祖父は日中・太平洋戦争で中国を転戦したあと、宮古島に３年ほど従軍した。

葛飾の正月は何処も居酒屋が開いておらず、祖父は家で夜遅くまで呑んでいた。「戦争はつらかった。ただ宮古島だけは、いい思い出だ。死ぬ前に一度行ってみたい」というのが口癖だった。

その祖父は十年前に亡くなり、ついに宮古行きは叶わなかった。

今回は七草明けに、記者は長期休暇がとれたので、日頃のリフレッシュも兼ねて、取材半分、観光半分の宮古ひとり旅を計画した。

表紙の掲載した写真は、伊良部大橋の記念碑ちかくで、たまたま見つけた珍しい岩である。記者は勝手に「亀の子岩」と名付けた。

観光ガイドには載っていなかったが、取材を進めると、宮古は民話の宝庫でもあり、将来に残すべき多くの知恵にあふれていた。

＊短編「結び岩」

＊のんべーの楽園

＊雨でも収穫あり

＊現代に通じる話

＊なんくるないさー

短編「結び岩」

「与那覇前浜村（よなはまえはまむら）」に、クインというたくましい男と、ユウナという、うるわしい女が暮らしていた。

たがいの親は裕福な家に住み、顔見知りだった。そこで、ふたりを結婚させようと話を進める。

ふたりは恋人がいなかったため、親のねがいに従った。そして２０歳どうしで結婚し、ともに村いちばんの働き者だと評判になる。

クインは漁師で、沖にでればサバニと呼ばれる小舟が、いっぱいになるほど魚をとった。ユウナも機織りが得意で、着物の出来栄えがすばらしく、町から注文が来るほどだった。

ところが何年経っても、ふたりには子どもができない。

たがいの親は「はやく跡継ぎがほしい」と催促するが、ふたりの仲は日に日に悪くなり、困り果てるばかりだった。

３月になったばかりのある日だった。たがいの親はふたりに対岸の「来間島（くりまじま）」まで、磯遊びに出かけようと持ちかける。

村の長老に相談して、その島に古くから伝わる「結び岩」という御嶽（ウタキ）に願をかければ、子宝に恵まれると聴いたからだ。

クインの父は長老の言うとおり、大きなくり舟を用意していた。

その日は雲は出ていたが日差しもあったので、６人は朝から舟をこぎはじめ、昼すぎにようやく来間島の岸までたどり着いた。

島に着くと両親は、クインとユウナに磯釣りをすすめた。しかし、相変わらずふたりは、目も合わさず、口もきかずに竿を垂れている。

夕方ちかくになり、あつい雲が垂れこめ、雷鳴もこだました。

クインの父が険しい顔をして、「あすの漁が心配だから、くり舟ですこし沖にでて、潮の流れを見にいく。親どうしでだいじな話もしているから、おまえ達はしばらく、あそこの岩陰で待っていなさい」と、いちばん大きな岩にを指さした。

それは長老から聴いていた、あの結び岩だった。

ふたりは親たちに言われるがままに従う。たがいのからだは離れたまま、じっと様子をうかがっていた。

とつぜん大きな雷が光った。舟はみるみる沖に向かって、進んでいくではないか。

「おれたちを残して、なぜ行ってしまうのですか」

クインはありったけの声をふり絞った。

「おいていかないで。たすけてください」

ユウナも声をあらげ、舟に向かって叫ぶ。

しかし、何も聞こえないように、舟は海の彼方に消えてしまった。

「おれたちは親に見捨てられた。ここで生きていくしかない」

「こんな何もない、離れ小島でなんか、暮らしていけないわ」

「こうなったのも、子どもをつくらなかった、俺たちが悪いんだ」

「いまそんなことを言っても仕方ないわ。忙しかったじゃないの」

ふたりはそれから黙ったきり、沖をみつめ、ぼう然と座っていた。

しだいに大粒の雨がふり出し、北風がかたい岩肌を叩きつけ、白波がはげしく舞い上がる。

見知らぬ鳥が鳴き、獣のうなり声も聞こえる。ふたりは岩深くまで逃げこみ、恐ろしさに震えながら、じっと耐えつづける。

「うすい服しか着てこなかったから、このままでは凍えて、朝までに死んでしまうかもしれないわ」

ユウナはながい黒髪をかき上げ、頬に大粒の涙をながし、からだを小さく丸めた。

「だいじょうぶだ。おれが守ってやる。すぐに温めてやるから」

クインは厚手の作務衣（さむえ）を脱ぎ、鍛えあげた胸板を突きだし、ユウナの肩にそっと掛けた。

クインはユウナの背中をさすり、口から白い息を吐きつづける。

ユウナは作務衣の袖を握りしめ、クインにじっと目を合わせた。

「どうした？　苦しいところでもあるのか？」

「いえ。これは、あなたにはじめて織った、作務衣でしたね」

「ああ。これがいちばん温かい。漁のときはいつも着ている」

「ずっと大切にしてくれたのね。ごめんなさい。わたしは、意地をはっていたんだわ。働き者のあなたに、負けてはならないって」

「いや、あやまるのは、おれのほうだ。おまえがいつも家にいないから、ふてくされていた。暮らしが楽になったのはおまえのお陰だ」

ふたりは後悔する一方で、はじめて心が通ったと感じ、かけがえのない夫婦になれた喜びをかみしめる。

「もしここで命をおとしても、あの世では仲よく暮らしましょう」

「ああ、もちろんさ。ほかに、誰がいるんだ」

ふたりは唇を重ね、嵐の音が聞こえぬほど、つよく抱きあった。

やがて嵐は静まった。空から太陽が昇り、波はすっかり穏やかになった。色とりどりの小鳥がさえずり、風に乗った蝶が楽しげに舞う。白い砂と碧い海が、朝の日差しにきらめいている。

沖からくり舟とサバニが、浜に向かって近づく。それぞれの舟には、たがいの親が分かれて乗っていた。

「ああ、神さま。わが子は無事でしょうか」と、母が声を震わす。

父が岩に向かって指さし、「おい、あそこにいるぞ」と、叫んだ。

ふたりはひとつに重なり、ぐったり倒れている。

両親が岸に上がり、結び岩に近づく。するとふたりは岩陰で、たがいの手を握りしめ、おおきな寝息をたてていた。

クインの父がサバニと結び岩を、荒縄でしっかり括りつける。両親は御嶽に感謝の祈りをささげたあと、くり舟で沖まで引き返した。

※宮古民話「夫婦結びの岩」などを参考に、記者が創作しました

ノンベーの楽園

宮古に着いた日は２２℃で、おだやかな天候に恵まれた。

空港のレンタカーショップで従業員に、「観光客が知らない所に行きたいのですが」と聞き込む。

まず腹ごしらえだと、情報収集のため、市内でいちばん大きなショッピングモールまで出発した。

イオンモール内の『なびい食堂』で、名物の「宮古そば」に舌鼓をうちながら、女性店員の『国仲さん』に話をうかがう。

「なびい」とは、村人が集まって食材を持ち寄り、ひとつの鍋を囲んで楽しく呑みながら、歌ったり踊ったりする場という意味らしい。

いま店で流行しているのが、「なーふぃー」という風習だそうだ。宮古にはなかったが、沖縄本島から移住した人が定着させたという。

赤ちゃんの首がすわり無事に育ったら、近所の人や友だち、親類らを集め、赤ちゃんの名前を宴席でお披露目する行事だそうだ。

「宮古の人はおおらかで、イベント好きですから。なにかと理由をつけて、大勢で騒ぐんですよ。まあノンベーにとっては、最高の場所じゃないでしょうかねえ」

島内では古希で赤いチャンチャンコを着て、特大ハンバーガーを切り分け、祝う団体客もいる。英語がペラペラの高齢者も多く、欧米の観光客と仲良くなる方もいるらしい。

雨でも収穫あり

２日目、３日目はあいにく、はげしい雨と風に見舞われた。

宿泊先『宮古温泉ホテル』の女性従業員で長野から移住した『竹内 望さん』から聴いた。

「民話や史実を調べるなら、島にひとつしかない『城辺（ぐすくべ）図書館』ですかね。

池間島（いけまじま）と、来間島（くりまじま）にも橋ができ、車で行けますが、大神島（おおがみじま）は漁船でしか行けません」

スコールのなか図書館を訪ねると、職員が快く応じてくれた。海軍兵舎が近隣にあったらしく、慰霊塔がひっそりと天に伸びている。

「宮古は平坦地ばかりです。この丘は見晴らしが良く、戦時中は敵の偵察に使っていました。村人の戦死者が多く、食糧不足で苦労されたのですが、軍人や進駐米兵とは良好な関係だったと聞いています。民話を知りたいなら、食堂か土産物屋さんに訊けばよいでしょう」

４日目にようやく晴れ間がのぞいた。前浜村近くの食堂で宮古ヤキソバを食べ、知りあった店員の『上地さん』が語った。

「伊良部島（いらぶじま）と下地島（じもじじま）にいけばいいや。あたししゃ、伊良部の出だけど、通り池が有名さー。ママッコ伝説とかね。いまは飛んでないけど、まえはパイロットの訓練もしてたさー。ほかの島はなーんもないよ。サトウキビとか、カツオ節つくるぐらいだわ」

現代に通じる話

通り池は下地島の西にあり、天然記念物に指定されている。

大小２つの円形の池は地下でつながっており、天候や水質でさまざまな色彩に変化する。

多様な魚介類が生息しており、ダイビングスポットで人気も高いが、上級者向けである。

「ママッコ伝説」はこんな内容だ。この地に住む漁師が妻に先立たれ後妻をもらった。やがて後妻は先妻の子をうとましくなり、寝ていたその子をそっと池に沈める。ところが実際は我が子だった。絶望した継母は池に飛びこみ命を絶ち、しばらくの間は幽霊が出たという。

通り池近くの『ホテルていだの郷』で雨やどりをして、コーヒーと軽食を注文し、マネージャーの『川口 信也さん』から話を伺った。

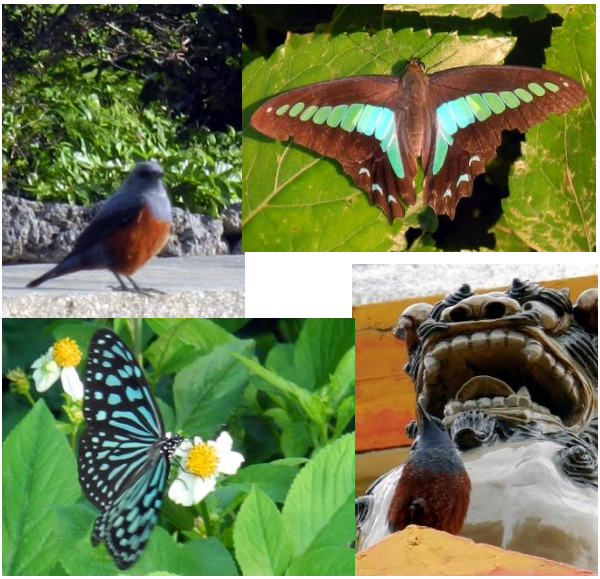
「以前は修学旅行生ばかりでしたが、最近はアジア近隣の観光客が多いですね。

私は奈良の出身です。大学卒業後は那覇に赴任し、そのあと宮古に定住しました。

昔は内地から来た者を『ナイチャー』と呼び、好奇な目で見られていました。でも近頃は頑張って働いたせいか、同じ『シマンチュウ』と思われています。沖縄本島の方も内地の者も、みな島国育ちですから」

私たちも外国人労働者を、色眼鏡で見ていないだろうか。しばし考えさせられた。

なんくるないさー



宮古は鳥や蝶もフレンドリー

＊写真・文章・編集：　隅田　昭

＊撮影：平成３１年１月１５～１８日

＊発行：平成３１年２月１０日

本冊子の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。